

学生取材レポート

第13回京都教育懇話会『世界を変えた日本のマンガ・アニメ文化』

10月29日(金)、京都市中京区にある京都国際マンガミュージアムにて関西プレスクラブ・京都国際マンガミュージアム・京都教育懇話会の三者共同によるフォーラム「世界を変えた日本のマンガ」が開催された。『アリエスの乙女たち』等、多くの作品をてがけた漫画家の里中満智子さんが基調講演を行い、そのあと「マンガ・アニメの未来」をテーマにパネルディスカッションが展開された。パネリストは里中さんに加え、マンガミュージアム館長である養老孟司さん、京都市長の門川大作さん、京都造形芸術大の寺脇研教授の4名。

里中さんの基調講演は、「日本の誇るべきものは受け入れたものを消化し、発展させる点にある」といった日本人の特徴を述べるところから始まった。里中さんは「漫画の神様」と称される手塚治さんの『鉄腕アトム』が子どものころに読んだ漫画の中で一番印象に残った作品だという。その『鉄腕アトム』を例に、正義と悪の表現方法の違いを指摘、「単純に正義は良し、とするのではなく、悪には悪になった原因や背景がある。それらを描写することで読み手の想像力が膨らむようになり、多様な生き方を知ることができた」と、日本の漫画は固定概念にとらわれず自由な発想で描かれた作品が多いことを主張。あらゆる心情描写が多くとられるようになったが故に、世界の壁を越え、多くの人に受け入れられるようになり、日本の漫画が高等な文化であると主張した。

また、現在の国内経済情勢についても持論を展開した。「困ったことを楽しむ、常識に挑戦することが漫画の発展の礎となった。現在の日本は不況で円高でどうしようもない状況に思えるが、困った状況を楽しみ、常に挑戦して行ってほしい。そうすることで、漫画が世界で認められたように何かが変わっていくかもしれない」と、マンガ家ならではのエスプリの聞いた主張で基調講演をまとめ、パネルディスカッションに移った。

グループディスカッションでは、寺脇さんが「制約の少ない日本文化の影響があるからこそ、漫画も飛躍したのではないかと問題提起。対して里中さんは、宗教的制約の少ない日本文化の特性に言及し「とりわけ食や性に対しておらかなであり、タブーにも挑戦できる土壌がある」と述べた。その話を受け、門川さんは「それぞれを尊重しながら宗教が存在しているのが京都。自分と違う存在を排斥しようとならない日本の宗教性・精神性を引き継いでいる」と京都を通して、日本の文化を説明した。また養老さんは「日本は暗黙の世界が存在し、大まかな枠がある。その枠内ならば自由が認められタブーも許されるが、社会の秩序に従わない和を乱すものには厳しい一面がある」とも解説、「世界に進出した MANGA の世界でも日本人がタブーを打ち破る大きな枠を作り出し、漫画文化を発展させることが求められるのではないかと締めくくった。

グループディスカッション後の質疑応答では、学生からの「日本の漫画を守る為になにをすべきか」という問いに対し、里中さんは「国の支援の方法が間違えば、文化は衰退する。国がすべきは漫画の発信力を補うことと、人材を育成する場を提供すること。現場に無用に干渉すれば逆効果」と述べた。

質疑応答後の懇親会には多くの学生が参加し、パネリストや一般参加者と話に花を咲かせた。参加した学生からは「参加者には社会の最前線で働いている人が多く、一緒に議論が出来て有意義だった」との声が聞かれ、超満員で行われたフォーラムは盛況のうちに幕を下ろした。

【取材：上田拓朗(龍谷大)・岸本香織(追手門大)・阪口彩子(立命館大)・仲村康平(摂南大)】